

1930年代におけるアンドレ・ジッドの共産主義論

——オスカー・ワイルドの『社会主義下の人間の魂』と の比較論的考察——

西村 晶絵

はじめに

1910年に出版されたフランス人作家アンドレ・ジッド(André Gide, 1869 - 1951)の『オスカー・ワイルド』(*Oscar Wilde*)は、その名の示す通りイギリス人作家オスカー・ワイルドOscar Wilde (1854 - 1900)へのオマージュである。この二人の作家が知り合ったのは、ジッドが文学者として生きる意志を固めてわずか2年後の1891年11月26日、パリにおいてであった¹。以後、ワイルドが同性愛裁判を経て貧困と孤独のうちに亡くなる1900年までの間に、彼らはパリや旅先のアルジェリア、ワイルドが出獄後に身を隠していたノルマンディーの小村などで、度々再会することとなる。『オスカー・ワイルド』に記されたこれらの交友関係の中で、ジッドはワイルドの宗教観や文学観、さらには同性愛観にも触れることとなった。

このような二人の作家の親交関係ゆえに、ジッドとワイルドの影響関係を指摘、検討する研究はこれまでもいくつか成されてきた。例えばヒラリー・ハッチンソンは、ワイルドがジッドに同性愛への性向を目覚めさせたこと、それゆえジッドの同性愛にはワイルドからの影響が色濃く認められることを主張する²。ジョナサン・フライヤーの著作においても、ワイルドの同性愛とジッドの同性愛の類似が示唆されているが、彼はまた『地の糧』(*Les Nourritures terrestres*, 1897)の語り手メナルクや、戯曲『サウル』(*Saül*, 1903)におけるサウル王は、ワイルドをモデルにして書かれたことを指摘してもいる³。

しかし、ジッドとワイルドの関係に着目したこれらの研究が扱うのは、ほぼ1920年代前半までの同性愛や宗教に関わるジッドの作品や思想に限られている。これは、この時期を境にジッドの作家活動が大きな転換点を迎えることと関係していると思われる。ジッドは1925年7月から1926年5月にかけてフランス領赤道アフリカを旅し、そこで植民地の悲惨な状況を目の当た

りにする。帰国後に出版された『コンゴ紀行』(*Voyage au Congo*, 1927) は、この実態を暴き、植民地において利益を貪る大会社を告発するものであった。そしてこの後、ジッドの関心は社会問題へと向かっていくこととなる。ドイツにおいてナチスが台頭してくると、ジッドはその全体主義を批判し、1932年頃からは共産主義に接近する。しかし、1936年6月に瀕死の状態にあった作家マクシム・ゴーリキー(1868 - 1936)を見舞うためソヴィエトを訪れた際、彼は「今日いかなる国においても、たとえヒトラーのドイツにおいてすら、人間の精神がこれほどまでに不自由で、これほど屈服させられ、恐怖に怯えさせられ、隷属させられている国があるだろうか⁴」という感想を抱く。そして、帰国後の同年11月にソヴィエトの欠陥を衝いた『ソヴィエト紀行』(*Retour de l'U.R.S.S.*)を出版すると、ソヴィエトやフランスの左翼陣営から激しい非難を受け、以後ジッドは共産主義から離れていくこととなる。

このようなジッドの問題意識や社会参加による創作活動の停滞を受け、この時期を扱うジッド研究においては、作家のアンガジュマンの足取りを追うことに重点が置かれてきた。中でも、ダニエル・ムートットの研究は、1926年から1939年までの時期におけるジッドの社会参加への動機やその様態を包括的に整理し提示している⁵。また、ジッド研究者ではないが、ジャン＝ピエール・ベルナルは、共産主義に接近した作家や知識人における政治と文学の関係について論じた著作の中で、挫折に終わるジッドの政治的立場の限界と、創作活動の行き詰まりの原因を正確に指摘している⁶。

しかしながら本論文が目指したいのは、このジッドの政治参加の時期、とりわけ共産主義に接近した時期におけるジッドの思想と、評論『社会主義下の人間の魂』(*The Soul of Man under Socialism*, 1891)に見られるワイルドの社会思想との近似性である。ワイルドのこの評論とジッドを関連付けて論じている唯一といえる先行研究は、ジェフ・ラストによる論文である。この研究の中でラストは、いくつかの作品と共に、主に『新しき糧』(*Les Nouvelles nourritures*, 1935)を取り上げ、それらの中に見られるジッドの思想と、『社会主義下の人間の魂』におけるワイルドのそれとの類似に言及している⁷。ラストの指摘は、ジッドが各作品において批判を向けた対象が、ワイルドによって上記の評論において批判されている事柄と共通していることを明らかにするものであった。一方、本論文が扱う対象としたいのは、ジッドの作品ではなく、共産主義への賛同を示した時期における彼の社会思想である。本研究の意義は、ジッドの共産主義論における批判の対象のみならず、共産主義社会に託した期待や希望もがワイルドの社会主義論

において示されるそれらと酷似していることを指摘しようとする点に認められるだろう。ジッドが共産主義に共感を示してから実際にソヴィエトを訪れ幻滅するまでの期間、彼がこの国に見ていた世界は、彼独自の仕方でも思い描いた社会であり、現実のソヴィエトとは異なる世界であった。したがって、まずは、このジッドの共産主義論の特徴を明らかにし、それらを理解した上で、そこにワイルドの評論、『社会主義下の人間の魂』の中で展開されている社会主義論との共通点を見出し得ることを示していきたい。

1. ジッドにおける理想的社会とワイルドにおけるそれとの共通性

ジッドが1930年代に共産主義に接近し、ソヴィエトへの共感を示した時、彼はそれらをいかなるものとして捉え、そこにいかなる希望を見ていたのであろうか。彼が1933年に日記の断章に記した次の文章は、彼のアンガジュマンの動機を的確に説明しているように思われる。

なぜ私は共産主義を望んでいるのか。それが公平であると信じているからだ。そして私が不公平に苦しんでいるからだ（中略）。我々が今なお生きているところのこの体制は、もはや今日ますます有害な悪習しか保護しないように思われるからだ。（中略）

なぜ私は共産主義を望んでいるのか。今人間がもう一段高い文化に到達し得るのは、それによってであると信じているからだ。新たな、そしてより良い文明の形を可能にすることができ、また可能にしなければならないのは共産主義なのである⁸。

ジッドは現行の社会体制、すなわち資本主義に対して不満をいだき、共産主義に対して、より公平な社会とより発展した文化レベルを期待している。しかし、この「公平」や「もう一段高い文化」とは、具体的にいかなるものを意味しているのであろうか。これらの言葉について理解することは、ジッドが社会参加を通して目指した社会の姿を捉えることにつながるだろう。

ではまず、ジッドにおける「公平」とはいかなる状態を指すものであるかを検討していくことにする。そのために、以下の引用を通して、ジッドの意味する「不公平」を理解することから始めたい。

「労働者、あるいは農民といった低い階級の人間は、結局尊敬になど値しない」という人々

は、私をなおも憤慨させる。(中略) 苦しみ、虐げられたこの労働者階級の上に、あなた方は腰を下ろし、あなた方の幸福を享受している。この階級者たちに対して今ある状態にならせ、そうあるように強いたのは、あなた方なのだということを理解しないこと、それは私には恐ろしいことのように思える。あなた方は彼らを愚かにし、墮落させ、卑しめたのだ(中略)。この階級の「劣等」は押し付けられたものである。(中略) 財産あるいは生まれによる「優越」というものは、本当の価値とは全く関係ないものである⁹。

ブルジョワ作家でありながら、ジッドが共産主義に接近する以前からこの階級を嫌悪し、階級制度自体を否定的に捉えていたことはよく知られた事実である。1933年の日記の断章に記された上記の言葉からもまた、労働者に対してシンパシーを抱き、彼らを虐げているブルジョワへ向けられたジッドの強い批判意識と、財産や生まれによって優劣を定める階級制度への非難を読み取ることができる。それに対して、彼は「私がソヴィエトの中に感心するのは、スタート地点の平等、機会均等の平等である¹⁰」と述べ、ソヴィエト社会を階級制度のない公平な社会として称賛するのである。

一方、ワイルドが『社会主義下の人間の魂』において社会主義社会を理想的な社会体制として論ずる際の起点となっているのも、現行の社会体制である私有財産制がもたらす人間の貧富の差についての批判である。この評論のあまりにも有名な冒頭には、以下のように書かれている。

社会主義の樹立によって生じるであろう主な利点は、疑いなく、現状においてほぼ全ての人間に非常に激しくのしかかる、あの他人のために生きるという卑しむべき必要から我々を救ってくれるであろうという事実である¹¹。

ワイルドはこの「他人のために生きる」ことを「利他主義」(altruism)と呼ぶのであるが、これは具体的に「慈善行為」(charity)や「善意」(benevolence)を働かせることを指している¹²。ワイルドが「利他主義」を認めないのは、そこに偽善を見て取るからである。例えば、他人が悲惨な貧困状態に置かれているのを目にした人々は、彼らに施しをしたり、気休めを与えたりすることで、貧困の問題を解決しようとする。しかしながら、ワイルドによれば、「これは解決で

はない。問題の悪化である。正しい目的とは貧困などありえないような基礎に基づく社会を試み再建することである。そして利他主義的な美徳こそ、実はこの目的の遂行を妨げてきたのである¹³。それに対して、社会主義体制下においては、貧困の問題は解決されるという。なぜなら「社会主義、共産主義、その他なんと呼ぼうと、それは私有財産を公共の富に転換し、競争を協力の置き換えることによって、社会を完全に健康な有機体というそれ本来の状態へ戻し、社会の各員の物質的福祉を保証するであろう¹⁴」からだ。

したがって、ジッドもワイルドも、資本主義社会によって認められている私有財産が不平等の元凶であると考え、それを撤廃すべく共産主義や社会主義の樹立を説いていることがわかる。しかしながら、このように万人の平等を目指す社会変革論は二人に固有のものではなく、むしろ共産主義者や社会主義者と呼ばれる人々が一様に掲げていた主張と同じものであつただろう。ところが、この論点を出発点として、ジッドとワイルドの思想は一般的な共産主義論、社会主義論とは異なる展開を示すのであり、そこには多くの共通点を指摘することができる。

それでは、再びジッドの共産主義論へと話を戻し、議論の展開を追いながら、具体的にその特徴を明らかにしていくことにする。上述のように、ジッドが共産主義国ソヴィエトに期待したのは、階級制度が廃止され、個々人が対等な立場に置かれた平等な社会であつた。しかしながら、ジッドが意味するそれは、「各個人に対して平等な機会を与えるだけで、決して性質の均一や一様化をもたらすものではない¹⁵」。ソヴィエトにおける順応主義や画一化、均質化を指摘する反共産主義者たちに対し、1935年に行われたパリ国際作家大会の演説「文化の擁護」の中で、ジッドは以下のように反論している。

共産主義に画一化の意図を見て取りかねないのは、共産主義の敵対者だけです。我々が共産主義に期待しているのは、そしてソヴィエトがより完全な解放を目指し、闘争と一時的な束縛の苦難の時期を経て我々に示し始めているのは、各人の最大限の成熟と、そのあらゆる可能性の誕生、発揮を可能にする社会状態なのです¹⁶。

ジッドは、共産主義が「個々人に価値を与え、個人のあらゆる価値を活用¹⁷」するものであると主張する。ルイ・アラゴン(Louis Aragon, 1897 - 1982) が1935年7月8日の『ユマニテ』紙において、「ジッドは人間の個性を画一化し、破壊するものとして敵から攻撃されている共産

主義が、逆に人間の能力を全体的に開花させることを目指すものであることを理解したのだ¹⁸と指摘していたように、ジッドは共産主義下においてこそ、個々人の本来の個性や能力が最大限発揮されると考えていたのである。

さらにジッドは、同演説において社会と各人の理想的な関係を、以下のように説明している。

私は完全に共産主義に賛同し、共産主義に力を借りてすらいっても、根本的に個人主義者であり続けていると断言します（中略）。なぜなら、私の常に変わらざる命題は、各人は最も独自のであることによって、最もよく共同体に役立つというものだったからです。今日これに、この第一の命題と対をなす、もしくはその必然的帰結である、もう一つの命題を付け加えましょう。それは、各個人と個人の独自性が最も開花し得るのは共産主義社会であるということです¹⁹。

ジッドは各人と共同体の最善の関係を実現するものとして共産主義社会を捉えていることがわかる。各人が「独自の」であることを認める社会が共産主義社会であるならば、各人が共同体にとって最も役立つことができるのもまた、共産主義社会においてであるということになるからである。また、ここでジッドは自らを「個人主義者」と呼ぶが、彼における「個人主義」とは、個性を表現・表明することを意味する語である²⁰。したがって、個々人に固有の価値の表現を認め、それを支持するジッドは、まさに個人主義者であるということになる。ジッドが共産主義に賛同を示しながらも個人主義者であるというのは、それら二つを人間の個性を認めるものとして、独自の仕方では解していたからである²¹。

このように人間の個性の発露を「個人主義」という言葉で表し、その発展を共産主義社会の中に展望しようとするジッドの議論は、共産主義論としては特異なものであろう。しかし、彼のこのような思想には、『社会主義下における人間の魂』の中で展開されているワイルドの社会主義論との類似を指摘することができる。

ワイルドが資本主義社会に存在する貧困の問題の解決を実現するため、社会主義に期待をかけていたことは先に述べた通りである。しかし、彼が私有財産制やそれに伴う貧富の差を認めないのは、単にそれが不公平だからというだけではない。貧困や悲惨な状況は人間の品位を落とし、人の性質に麻痺的影響を及ぼす²²ため、「人間は自分の中にある素晴らしい魅力的な、楽

しいものを自由に発展させることができなく²³」なると考えるからでもある。

私有財産の認知は、人間と人間の所有物とを混同することによってまさに個人主義を害し、これを曇らせてしまったからである。それが個人主義をすっかり迷わせたのである。成長ではなく、利得をその目的としたのである。そのため人間は重要なことは持つことであると考え、重要なのはあることだということがわからなくなった。人間の真の完成は、人間の持つものではなく、人間がそうあるところのものにこそ在るのである。私有財産は真の個人主義を押しつぶして、虚偽の個人主義を押し立てたのだ²⁴。

ワイルドによれば、私有財産制の下では、財産が人間に付与する「社会的地位、名誉、尊敬、肩書²⁵」や、「物や物の象徴²⁶」といったものの蓄積に人間の生が浪費させられている。しかし、このようなものは取るに足らぬものであり、「虚偽の個人主義」の象徴に他ならない。なぜなら、「人間が本当に持っているものとは、彼の内にあるもの²⁷」だからである。「したがって、私有財産の廃止と共に、本当の、美しい、健康な個人主義が生まれるであろう²⁸」とワイルドはいう。その「健康な個人主義」とは、具体的に以下のように説明されるものである。

個人主義は人間になんらの強制をも加えない。逆にそれは人間に対して、彼に加えられるいかなる強制も許すべきではないと告げるのである。(中略) 人間は個人主義を自己の内部から発展させるであろう。(中略)

個人主義はまた無私であり素朴であろう。(中略) 人間は、今日、自分の着たいように着ていると気取り屋と呼ばれる。しかしそうすることで、人間は完全に自然なやり方で行為しているのである。(中略) あるいはまた人間は、自分の個性を十分に実現するのに一番ふさわしいと思う形で生活すると利己的と呼ばれる(中略)。だがこれこそ各人の生きるべき道なのだ。利己的とは自分の生きたいように生きることではない。それは自分の生きたいように他人に生きよと求めることである。(中略) 個人主義のもとで、人々は全く自然で絶対に無私であろう(中略)。また人間は今のよう自己中心的ではなくなるであろう。なぜなら、自分本位の人間とは他人に注文をつける人間のことであるが、個人主義者はそんなことをしたいとは思わないだろうからだ²⁹。

したがって、ワイルドもまた「個人主義」という言葉を、外的なものに煩わされることなく、「人間の真の個性³⁰」に価値を認め、それを自由に発展させようとする立場を示す語として用いていることがわかる。そして、彼においても、その個人主義は社会が私有財産制を脱する時、誕生するものなのである。

さらに、ジッドとワイルドの議論を追っていくと、共産主義や社会主義社会に個々人の個性が尊重される社会を見出そうとしていた点だけでなく、キリストの教えに忠実な世界を見ようとしていた点も共通していることが指摘できる。

ジッドは、現行の社会を告発する際、資本主義のみならずカトリックに対しても非難の矛先を向ける。彼によれば、資本主義以上にキリストの教えに対立するものはない³¹。しかし、資本主義と結びついたカトリックは、虐げられている人々の希望をこの世ではなくあの世へ持っていくことによって彼らを慰めるばかりで、状況を改善しようとはしない。それゆえ、結局は虐げられる人々に利を与えているという³²。彼は、資本主義と共に、カトリックは人間間の貧富の差を固定化する役割を果たしていると主張するのである。

しかし、ジッドの非難が直接キリストに向けられることはない。1932年2月27日の日記には、以下のように記されている。

資本主義の社会がキリストの中に支持を見出し得たというのは、キリストには責任のない奇怪なことである。この責任を負わなければならないのは聖職者である。聖職者はキリストをすっかり併呑してしまったので、今日では聖職者を厄介払いしようすれば、彼と同時にキリストをも棄てなければならないかのようである³³。

ジッドは資本主義社会やそれと手を組んだ聖職者を攻撃し、それらの支配する社会からの脱却を掲げて共産主義に接近していながらも、神の存在やイエスの教えを否定してはいない。ジッドにおいては、共産主義とイエスの教えは矛盾するものではなく、それらは調和するものとして捉えられている。彼の1932年6月13日の日記には、「キリスト者でありながら私は常に[共産主義者]であったのだ。まさにそれゆえ、私はこの両者を切り離して考えることはできな

ったし、ましてや対立するものとみなすことはできなかつた³⁴」と記されている。ジッドが共産主義者でありながらキリスト者でもあるというのは、個々人の個性が尊重されるはずの共産主義社会は、「人類の解放を説く福音書の教義³⁵」が説く世界と一致するものだと考えていたからである。彼は1888年頃を境に、幼少より受けてきた厳格なプロテスタント教育から脱し、福音書から直接教えをくみ取ろうと試みるようになる³⁶が、それ以後、神は人間が画一的なものに陥ることなく、各人が天性にしたがって生きることを求めていると考えるようになっていたのであつた³⁷。そして1933年6月付（日にち不詳）の日記における「私を共産主義に導いたのは、マルクスではない。それは福音書なのだ³⁸」という告白や、1935年に行われた討論会「真理のための連合」での「私を〔共産主義に〕賛同させたのは、確かにマルクス主義理論ではありません³⁹」という言明に示されているように、ジッドはマルクス主義に傾倒し、そこから共産主義に接近したわけではなく、それを福音書の説く世界と一致するものとして独自の仕方で解し、称賛するに至っていたのである。

一方ワイルドにおいても、人間が自らの内にあるものを発展させることは、キリストの教えに適うこととみなされている。彼は人間へのキリストの言葉はただ、「汝自身であれ⁴⁰」（« Be thyself »）であつたという。

イエスはある者に言った。「おまえには素晴らしい個性がある。それを発展させなさい。おまえ自身でありなさい。おまえの完成が外的なものの蓄積や所有にあるなどと思ひ違ひをしてはならない。おまえの完成はおまえの内にあるのだ。（中略）そしてまた私有財産を除くよう努めなさい。それは卑しい先占、無限の勤勞、悪事の連続を伴う。私有財産は一步ごとに個人主義を阻むのだ。」⁴¹

ワイルドは、イエスは私有財産を否定し、人間はそのようなものの獲得や蓄積によってではなく、自らの内に秘めた個性を発達させることによって完成に達すると説いていると主張する。ワイルドによれば、「キリスト教信者の生活を送ろうとするものとは、完全かつ絶対に自己自身であるところのもの⁴²」なのだが、先に示したように、彼は自己の個性に忠実であろうとする態度を「個人主義」と呼んでいた。そして、それが社会主義の樹立と共に誕生すると捉えていた。したがって、「個人主義」を可能にする社会主義はイエスの教えと一致した世界をももたら

すということになる。

(前略) 個人主義にはなにか示唆に富むものがある。例えば、社会主義は家族生活を全滅させる。私有財産の廃止と共に、現形態での結婚は消滅しなければならない。これが政綱の一部なのである。個人主義はこれを受け入れて、優れたものとする。法的制限事項の廃止を一種の自由へと変えるのである。この自由は、個性のゆたかな発展を助け、男と女の愛を一層素晴らしく、一層美しく、一層高貴なものにするであろう。イエスはこれを知っていた。彼は家族生活の要求を拒否した。それは非常に顕著な形で、彼の時代と社会に存在していたのであるが⁴³。

ワイルドによれば、本来自由でなければならない男女の結合が、私有財産制の下での法や義務によって縛られた現社会においては、不自由な状態に置かれている。しかし、社会主義はこれらの軛を取り払い、個人主義と共に人間関係をより自由なものへと変える。そして、それこそがイエスの教えに示された、あるべき人間関係の実現なのである。

ところで、『地の糧』における有名な「家族よ、私はおまえを恨む」(« Famille, je vous hais ! ») という言葉にあるように、ジッドもまた家族制度反対論者であったことはよく知られている。1897年に書かれた「キリスト教的モラル」(« Morale chrétienne »)において、「何度福音書を読んでも、家族や結婚というものを裏付けたり、さらには正当化し得るようなキリストの言葉は一言も見つからない。その反対に、私はそれを否定する言葉を見出すのだ…⁴⁴」と記しているように、ジッドが「家族」を認めない理由もまた、イエスはそのようなものを望んでいなかったと考えるからである。ジッドはこの制度の消滅を共産主義国ソヴィエトに期待していた⁴⁵が、それは共産主義がイエスの教えを実現するものであると考えていたからに他ならない。したがって、この「家族」という制度をめぐるても、ジッドはワイルドの見解と相似した主張を行っていることが指摘できる。

さて、我々は冒頭でジッドにおける「公平」とはいかなる状態を指すか、という問いを立てていた。以上に見てきたように、この問いに対しては、階級制度がもたらす貧富の差の撤廃された状態、そして個々人に対して各々の価値を認め得る状態を指していると回答することができる。ジッドが共産主義国ソヴィエトに期待していたこの「公平」な社会は、個人主義が十全

に達成された社会である。そして、イエスの教えを実現した社会である。また、ジッドのこのような議論は、ワイルドの社会主義論と非常によく似通ったものであった。呼び方は異なっても、彼らが「共産主義」あるいは「社会主義」という言葉によって意味するものは、同じものであったとすら言うことができるだろう。実際に、彼らがそれらの社会体制を通じて構築を目指していた社会は、酷似していたのであるから。

2. 社会変革論から芸術論へ

ジッドが共産主義に対して、「公平」であることの他に、「もう一段高い文化」への到達を可能にすることを期待していたことを、ここで今一度思い起こそう。ジッドは、文化の状態は社会の状態と密接に関係しており、社会が今のままである限り第一に心がけなければならないのは、社会を変革することであるという⁴⁶。ジッドによれば、西欧の文化や文学、芸術は、長きに渡って、労働によって余暇を奪われることのない特権階級によって独占されてきた⁴⁷。しかし、階級が消滅し、「各小国家の言語や風習、慣行、文化が尊重されている⁴⁸」ソヴィエトにおいては、西欧のものとは異なる新しい文化がもたらされるであろうというのである。それはいかなる文化なのであろうか。そして、ソヴィエトはそこに到達するまでに、いかなる仕事を成し遂げなければならないのであろうか。

ジッドは、ソヴィエトが「もう一段高い文化」に到達するには、「文学と芸術において共産主義的個人主義⁴⁹」を確立することが必要であるという。第一回ソヴィエト作家総同盟会議（1^{er} Congrès des Écrivains Soviétiques, 1934年）へのメッセージの中で用いられたこの「共産主義的個人主義」(individualisme communiste)という語は、1932年のソ連作家協会(Association des Écrivains Soviétiques)の規約の中に掲げられたスローガン、「社会主義リアリズム」(réalisme socialiste)に対置されたものである。同協会は、共産党の英知と偉大さや、プロレタリアートの英雄的闘争、社会主義の勝利についての感興を描く作品の創作を主要な目的として掲げていた⁵⁰。このようなソヴィエトの文学界の動きに対し、ジッドは先のメッセージの中で次のように警鐘を鳴らしている。

共産主義は各個人の特徴を尊重することによってしか、自らの価値を認めさせることはできないでしょう。各々皆が似ている社会というのは望ましくありません。それは不可能で

あるとさえいうことができるでしょう。文学においてはなおさらです。各芸術家は、どれほど彼の共産主義的信条や党への愛着が強いものであろうとも、必然的に個人主義者であります。芸術家が有用な作品を生み出し、社会に奉仕することができるのは、このようにしてなのです⁵¹。

同メッセージの中で、ジッドは社会や組織といったものが芸術作品のモチーフやテーマを規定するのではなく、芸術家の個性を尊重することが大切であると説いている。また、パリで行われた、この第一回ソヴィエト作家総同盟会議についての報告会の場で、彼は「文学と革命」と題した演説を行い、あらゆる文学や芸術は革命に奉仕することが可能であるが、そのみに専念すべきではないとの見解を示している⁵²。いくらそれらが奉仕する主義主張や教義が高尚で正当なものであったとしても、外部の何かに服従した芸術は墮落した芸術であり、画一主義の中に埋没してしまう危険性があると考えからである⁵³。それゆえジッドは、「勝利を得た革命が芸術家に与えることができ、与えるべきものは、何よりも自由である。それなくしては、芸術はその意義と価値を失うものである⁵⁴」という。彼にとっては、芸術があらゆる権威や外の圧力から自由でいられることが重要なのである。

また、芸術家の側も、「ある階級、ある時代の人々の束の間の欲求にこたえるだけ⁵⁵」の大衆的な作品を作り出すことに甘んじてはならない。ジッドによれば、「すべての偉大な作家や芸術家は本質的に反順応主義者⁵⁶」であった。彼らは常に何かに抵抗し、同意を拒んできたのであり、その意味で程度の差こそあれ、彼らは革命家であり闘争者なのである⁵⁷。したがって、革命家あるいは闘争者たる芸術家は、作品を創作するにあたり、あらゆる外的要因に屈せず、自らの意志を貫くことで偉大な作品を生み出してきたと言えるが、このように自分自身の価値観や理念に従って自由に活動する芸術家とは、まさに個人主義者に他ならない。先に示したように、ジッドは共同体にとって各人が最もよく役立つことができるのは、彼らが最も独自のである場合においてであると考えていた。芸術家の場合もそれは同じであり、有用で社会に奉仕するような作品を生み出すことができるのもまた、彼らが個人主義者である場合においてであるとジッドは主張するのである。

このような個人主義者ジッドの芸術家としての自覚は、彼の行動にも現れている。彼は共産主義やソヴィエトの主義主張に賛意を示しながらも、共産黨員になることや革命的芸術家作家

協会AEAR (l'Association des Écrivains et Artistes Révolutionnaires) などの組織に加盟することは頑なに拒否し続けた。組織からの要求を満足させられるということについて全く自信が持てないし、命令に従って語るよりもむしろ口をつぐんでいる方がいいと考えたからである⁵⁸。また、1933年には、青年世界大会 (Congrès mondial de la jeunesse) の事務局に宛てて、自分の名前を大会のパンフレットに載せないように求める書簡を送るが、これは彼自身が自由に書くことが可能な状態こそが、最善かつ長期的な方法でこの大会組織に役立つことができると信じていたからであった⁵⁹。そして、自らが自由に書くことができる状態における、作家としての自らの使命を、ジッドは以下のように語っている。

私はというと (中略) ブルジョワ家庭の出で、ブルジョワ教育を受けましたが、文学の道に足を踏み入れた当初から、自分自身のうちにある最も正真にして、最も正当かつ価値があると思われるものは、ことごとく自分の階層の慣行、慣習、虚偽に直接正面から対立していると感じざるを得ませんでした。私たちが未だに暮らしている資本主義社会において、今日価値ある文学とは反体制の文学以外ではほとんどあり得ないように思われます。

ブルジョワ作家にとって自己の階級に共感することは不可能です。では、民衆に共感することは…残念ながらこれも同じく不可能だと思われまます。民衆がなお今日のようなものである限り、そうあり得る、あらねばならぬ、我々が手を貸せばそうなるであろうものにならない限りは不可能でしょう。残る可能性は未知の、未来の読者に語りかけること、そして、より根本的で動かし難く人間的であると感ずるものを自己の内部で掴まえれば、未来の読者を捉え得ると確信することだけなのです⁶⁰。

ジッドはブルジョワ作家という自らの階級的立場において、この階級に共感することも、民衆に共感することも現時点においては不可能であるため、未来の社会に生きる人々に対して語ろうとする。この未来の社会、すなわち資本主義社会の限界を乗り越え到達する共産主義社会においては、ブルジョワや民衆といった階級の区別は存在しないであろう。そして慣習や因習的な文化・文明から脱したこの新しい社会においては、「人間そのものが変化している⁶¹」のである。

ジッドにとって、いまだ闘争に満ちているソヴィエトは、この理想的な社会状態に至っては

いない。そして、このような状態がソヴィエトの文学の性質を準備段階のものにしているという⁶²。しかしながら、理想的な共産主義社会がソヴィエトにおいて完成される時、並外れた文学作品が誕生する⁶³。それらは変化した人間の新たな精神によって活気づけられた「喜びの文学」に他ならない⁶⁴。

ソヴィエトの文学が最も華々しくブルジョワの文学に抵抗するのは、喜びによってであります。喜び、それは残念ながら他のヨーロッパにとっては未だ全く手の届かないものであり続けていて、我々は目下それを望むことしかできないものですが、それは徐々に、私が期待するに、ソヴィエトから地上全体を照らすようになるでしょう。我々にとって未だユートピアであるものが、ソヴィエトでは現実のものとなるし、そうならねばならないのです⁶⁵。

ジッドは未来に関して、喜びが万人に行き渡るような社会状態と、喜びによって偉大になることのできる人間を想像し、求めていた⁶⁶。そしてこのような喜びに満ちた社会に呼応して花開く文化が喜びの文化であり、それこそがジッドにとっての「もう一段高い文化」なのである。

以上のように、ジッドの共産主義論は芸術と社会を一体的に捉え、その変革を目指したものであった。ジャン＝ピエール・ベルナルが「ジッドの共産主義へのコミットは、彼にとって自らの生を根本から変えるものではなかったし（中略）、彼の行動は精神の次元に限られたものだった⁶⁷」と指摘するように、作家としての自らの生に留まり、政治実践とは距離を置いたジッドの共産主義論は、あくまでも理論的、思弁的なものである。ジッドは、討論会「真理のための連合」において「私が最も執着しているのは、自分の芸術である⁶⁸」と自ら告白しているように、芸術の自立性やその表現の自由を獲得することこそが彼にとって重要だったのであり、それが可能になる社会の実現を共産主義に求めていたのである。

さて、ノルベルト・コールが『社会主義下の人間の魂』について、社会主義理論に関する議論のためのものではなく、美学的な個人主義のための書であると評しているように⁶⁹、この評論におけるワイルドの社会主義論もまた、芸術家の立場から唱えられた特異なものであり、芸術論へと向かうこととなる。そしてその議論と前述のジッドの議論の中核は共通していることが指摘できる。それでは、実際にワイルドが社会主義論から芸術論へと論を発展させる過程を

追い、彼らの主張の共通性を明らかにしていくことにする。

先に述べたように、ワイルドは、財産や地位といったものの競争から解放され、富が公共のものとなり、各人の物質的福祉が国家によって保障される社会主義下における各人は、自らの個性を自らの仕方発展させることができると考えていた。このような個人主義の行き渡った社会において、彼は「個人は美しいものを創るべきである⁷⁰」という。この「美しいもの」とはすなわち、「芸術」を意味するのであるが、ワイルドがこのように主張するのは、「芸術はこれまで世人の知ってきた最も強烈な形の個人主義である⁷¹」と考えるからに他ならない。ワイルドは、人間の個性を花開かせる個人主義は、芸術においてその最も豊かな表現を見出すと主張するのである。

一方、社会や教会、政府の側からの「想像力豊かな芸術の個人主義に干渉しようとする試みは今でも消えずに残っている⁷²」。例えば、民衆は芸術に対して、自分たちの趣味を満足させたり、自分たちの虚栄心にへつらったり、自分たちの気晴らしとなることを求める⁷³。そして彼らは、芸術活動を自立した人間による個性的な表現として理解することができないために、個性的で新しい表現様式の作品の創り手たちに対して、なぜ旧来の作家や画家たちと同じように創らないのかと尋ねるのである⁷⁴。

しかしながら、「芸術は断じて人気とりをしようとするべきではない⁷⁵」。なぜなら、芸術家もものを創る時、「それを自分自身の喜びのためにするのでなければ、彼は全然芸術家ではない⁷⁶」からである。

(前略) ある社会もしくは社会の強力な一部、またはなんらかの政府が、芸術家になすべき仕事を指令しようとする時はいつでも、「芸術」はすっかり姿を消してしまうか、でなければ紋切型になるか、あるいは程度の低い下劣な技巧に墮してしまふ。芸術作品は無二の気質の無二の成果である。その美しさは作者が作者その人であるという事実由来する。それは、他人は彼ら自身が求めているものを求めるという事実とは何のかかわりもない。実際に、芸術家が他人の求めるものに注目し、その要求を満たそうとする途端、芸術家であることをやめて、退屈なまたは人を楽ませるだけの職人、正直なまたは不正直な御用聞きとなる。もはや芸術家と目される資格がないのである⁷⁷。

ワイルドは、個人主義者たる芸術家は、あらゆる外的な権力や圧力に屈することなく、自らの仕方ですら求めたものを創造すべきであると主張するのである。

ところで、ワイルドによれば、民衆が芸術に対して「滑稽であると同時に不道徳で、軽蔑すべきものであると同時に墮落した権威⁷⁸」を行使しようとするのは、それが「強烈な形の個人主義」であるからだという。彼らが芸術家によってもたらされる新しい形の美の自由な表現を「不可解」や「不道徳」、「不健康」などという文句で攻撃しようとするのは、その斬新さが怖いからである⁷⁹。なぜなら、芸術、すなわち個人主義は、心をかき乱し破壊するエネルギーであり、単調な紋切型や慣習の隷属性、非道な習慣といった既存の秩序をかき乱そうとするものだからである⁸⁰。しかし、ワイルドはこの点にこそ芸術の素晴らしい価値が認められるのである。

ワイルドによれば、芸術家がいかなる外的な要因にも煩わされることなく自由に、自然に発展することができたために、偉大で個性的な芸術家や人間が輩出したのはルネサンス期であった⁸¹。その反対に、芸術家の個人主義を破壊し、表現の自由を奪ったのはルイ 14 世であり、その結果、この時期の文物は単調な反復によってひどく醜いものとなり、規則への服従のために卑劣なものとなってしまったのであった⁸²。しかしながら、過去は重要ではない、とワイルドは言う。そして、彼にとっては現在もまた重要ではない。なぜなら、「我々の扱わねばならないのは未来なのである。というのは過去とは人間があってはならなかったものだからである。現在とは人間があるべきでないものである。未来とは芸術家があるところのものである⁸³」からだ。ワイルドは、未来に対して、「芸術家があるところのもの」、すなわち個人主義が可能となり、人間の個性が伸び伸びと発展する社会を想定し、それを志向する必要性を訴えるのである。

他方ワイルドは、このような図式は非実際的なものであり、人間の本性に逆行するものとみなされるであろうことを認める⁸⁴。実際的とみなされる図式とは、すでに存在しているか、あるいは現状のもとで遂行できるものであり、また人間の本性は恒久的なものであると考えられているからである。しかしながら、我々が拒否しなければならないのは、まさにこのような既存の概念であり、これを受け入れる図式は間違っていて愚かなものである。そして、未来においてはこのような状態は取り除かれ、人間の本性は変化するであろう⁸⁵。個人主義が達成され人間が自由になる時、人間は自己の内部から成長し、発展することができるからである。

またワイルドは、個人主義が実際的であるか否かを問うのは、進化が実際的であるか否かを

問うようなものであるという。なぜなら、「進化は生命の法則であり、個人主義へ向かう以外に
進歩などない⁸⁶」からである。そして、「進歩とはユートピアの実現である⁸⁷」。ワイルドによ
れば、進歩の先にある未来の個人主義は喜びを通して発展するという。社会は、社会主義を通
じて貧困を解決することで、喜びを通じて自己を表現する個人主義の実現を目指すからであ
る⁸⁸。そして、この個人主義はこれまでのいかなる個人主義よりも偉大で、豊かで、美しいも
のとなる⁸⁹。ワイルドが社会主義を通じて個人主義を目指すのは、それが喜びである美⁹⁰への
専念を可能にすると考えからなのである。

以上のことから、ワイルドの社会主義論とジッドの共産主義論は次の各点において共通性を
指摘することができる。まずは、個人主義と芸術をイコールの関係として捉えている点である。
彼らによれば、芸術とは芸術家の豊かな個性を表現したものである。それゆえ、芸術は個人主
義の賜物であり、その芸術をもたらす芸術家は個人主義者に他ならない。また彼らは、そのよ
うなものとして芸術があるためには、芸術はあらゆる権威や権力に屈してはならないと主張す
る。ジッドとワイルドにとって、芸術家たちは既存の物事に抵抗し、それを打ち砕こうとする
エネルギーを秘めた人々であった。したがって彼らは、芸術家自らの信念にしたがって作り上
げられた芸術は、抵抗を伴い、それを克服しながら成り立つところにその価値があると考え
るのである。また、彼らが共に過去や現在においては果たされなかった個人主義を、社会主義あ
るいは共産主義を通じて形成される未来社会において期待していることも重要な共通点である。
目下はユートピアに過ぎない真の個人主義が達成された社会が現実のものとなる時、彼らは人
間すら変わることができるという。そして社会は喜びによって満たされることになるという。
ジッドもワイルドも、このような喜びに満ちた社会こそが、文化や芸術にとって最もふさわし
い社会であると考え、その実現を希求していた。このことから、彼らの社会変革論の行き着
く先は、芸術論であったことが理解されるだろう。

おわりに

以上見てきたように、ジッドがソヴィエトに接近した時、共産主義に対して期待していたの
は、階級制度やそれに付随する貧富の差が消滅し、個々人の個性が開花し得る「公平」な社会
と、そのような社会において可能となる「喜び」によって特徴づけられる「もう一段上の文化」
の実現であった。そして、このようなジッドの共産主義論は、ワイルドが『社会主義下の人間

の魂』において論じた社会主義論と、多くの点で共通するものであることが明らかとなった。

このような彼らの思想の類似はいかにして説明されるものであろうか。この答えとしては、二つの可能性があるだろう。まず一つは、彼らが同じ社会主義論者、あるいは共産主義論者の著作を読み、そこから等しく同じような影響を受けたという可能性。そしてもう一つは、ジッドがワイルドの社会主義論に影響を受けた可能性である。一つ目の仮説を立証することは難しい。ワイルドの社会主義論は、思想家ウィリアム・モリス (William Morris, 1834 - 1896) の著作から影響を受けたものであると考えられているが⁹¹、ジッドはこの思想家の著作には馴染みがなかったからである。一方、二つ目の仮説についても、ジェフ・ラストがすでに指摘していたように、ジッドが『社会主義下の人間の魂』を読んだという確証はなく⁹²、この著作の社会主義論から直接的な影響を受けたことを証明することは困難である。しかし、ワイルドの他の著作や彼との実際の交流を通じて、ジッドがワイルドの社会論や芸術論、そしてそれらに関連する思想を理解していたと想定することは十分に可能であろう。

例えば、ジッドはおそらく、ワイルドの社会主義論や芸術論において重要な「個人主義」の概念を正しく認識していた。ジッドの日記や『オスカー・ワイルド』といった著作において、ワイルドのこの言葉への言及が散見されるからである。1927年5月8日のジッドの日記には次のように書かれている。

私はワイルドが次のように言うのを聞いたことを思い出す。「私の過ちは、個人主義に走りすぎていたことではない。私の大きな過ち、自分に対して許すことができない失策は、ある日、自分の個人主義に固執することをやめてしまったことである。他人の話に耳を傾けるために、それを信じることをやめてしまったことである。そして、このように生きるのは正しいのだと信じることをやめ、自分を疑ったことである⁹³」。

この言葉から、ジッドはワイルドにおける「個人主義」を、自分の内なるものに忠実でいようとすることを指すものとして理解していたと考えられる。

さらに、ワイルドがジッドに語ったとされる芸術論が、アンガジュマンの時期のジッドにおいて自らのものとして発言されていることにも注目してよいだろう。ジッドは芸術作品の価値は必ずしも直ちに認められるものではなく、真に価値ある作品は、後になって初めて理解され

ることがあるという⁹⁴。そのような作品がすぐに理解されないのは、それが未来の問題を予感させるような新しい疑問をもたらすものであり、未だ提起されたことのない問題に対して解答を与えるようなものだからである⁹⁵。そしてジッド自身は、モスクワの学生たちへの演説において、「私はいつも後にくる人々のために書いてきたのです⁹⁶」と述べているように、次の世代に向けて書くことを使命としていたのであった。ジッドがこのような意識に至ったのは、ワイルドに言われた次の言葉があったからだと思われる。

芸術家には二種類いる（中略）。一方は答えをもたらし、他方は問いをもたらす。自分が答える人なのか問う人なのかを知る必要がある。作品には、長持ちするが、長い間理解されないものがある。それは、それらの作品が、人がまだ提起していなかった問いに答えをもたらしたからである。なぜなら、問いはしばしば、答えのあまりに後になって到着するものだからだ⁹⁷。

先のジッドの芸術論が、このワイルドの芸術論を念頭において形成されたものであることは疑い得ない。またこの例は、1930年代後半のジッドの政治参加の時期においてもなお、ジッドの主張の中にワイルドの存在が見出せることを示してもいるだろう。

このように、ジッドはワイルドの著作や彼との交際を通じ、ワイルドの社会主義論の要となる「個人主義」の概念や、未来に希望を見ようとする芸術論を把握していたと考えられる。したがって、ジッドの共産主義論におけるワイルドの社会主義論との類似は、ワイルドの思想をジッドが自らの議論の中に取り込んでいった結果として見ることができるのである。

¹ *Dictionnaire Gide*, sous la direction de Pierre Masson, Jean-Michel Wittman, Paris, Classique Garnier, 2011, p. 436.

² Hilary Hutchinson, *Théories et pratiques de l'influence dans la vie et l'œuvre immoraliste de Gide*, Fleury-sur-Orne, Minard, 1997, p. 97.

³ Jonathan Fryer, *André & Oscar : The Literary Friendship of André Gide and Oscar Wilde*, New York, St. Martin's Press, 1998.

⁴ André Gide, *Retour de l'U.R.S.S.*, in *Souvenirs et voyages*, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 2001, p.

774.

⁵ Daniel Moutote, *André Gide : l'engagement (1926-1939)*, Paris, SEDES, 1991.

⁶ Jean-Pierre A. Bernard, *Le parti communiste français et la question littéraire, 1921-1939*, Grenoble, Presses Universitaires de Grenoble, 1972, pp. 153-176.

⁷ Jef Last, « D'Oscar Wilde aux *Nouvelles Nourritures* », *La Revue des lettres moderne*, n° 223-227, 1970, pp. 122-135.

⁸ André Gide, *Journal II 1926-1950*, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 1997, p. 446.

⁹ *Ibid.*, pp. 442-443.

¹⁰ *Ibid.*, p. 443.

¹¹ Oscar Wilde, *The Soul of Man under Socialism*, in *The Complete Works of Oscar Wilde*, vol. 4, New York, Oxford University Press, 2007, p. 230.

¹² *Ibid.*, p. 232.

¹³ *Id.*

¹⁴ *Ibid.*, p. 233.

¹⁵ André Gide, *Journal II 1926-1950*, *op. cit.*, p. 425.

¹⁶ André Gide, « Défense de la culture », in *Littérature engagée*, Paris, Gallimard, 1950, p. 95.

¹⁷ André Gide, *Journal II 1926-1950*, *op. cit.*, p. 352.

¹⁸ 以下のページよりダウンロードした資料を参照した。

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k405426c/f4.image.langFR>

¹⁹ André Gide, « Défense de la culture », *op. cit.*, p. 85.

²⁰ *Dictionnaire Gide*, *op. cit.*, p. 191.

²¹ ジッドは共産主義に接近し始めた当初から、一見対立する概念であるように思われる共産主義と個人主義を、両立するものであると考えていた。1932年2月9日の日記には、「個人主義を共産主義に対立させるのは誤りだと思う。この対立関係は必然的なものとは思われず、また私はこの対立を容認する気はまったくない」と記されている。(André Gide, *Journal II 1926-1950*, *op. cit.*, p. 348.)

²² Oscar Wilde, *The Soul of Man under Socialism*, *op. cit.*, p. 235.

²³ *Ibid.*, p. 238.

²⁴ *Ibid.*, pp. 237-238.

²⁵ *Ibid.*, p. 238.

²⁶ *Ibid.*, p. 239.

²⁷ *Ibid.*, p. 238.

²⁸ *Id.*

²⁹ *Ibid.*, pp. 263-264.

³⁰ *Ibid.*, p. 239.

³¹ ジッドにおいては、資本主義のみならず、国粹主義や帝国主義、軍隊なども、キリストの教えに対立するものとして捉えられている。彼は、これらの「この世の最も悪く、本質的に最も反キリスト教的な勢力」と手を組んだ責任は、すべてカトリックにあると非難している。(André Gide, *Journal II 1926-1950*, *op. cit.*, p. 441 参照.)

³² *Ibid.*, p. 397.

- ³³ *Ibid.*, p. 354.
- ³⁴ *Ibid.*, p. 368.
- ³⁵ André Gide, *Retour de l'U.R.S.S.*, *op. cit.*, p. 795.
- ³⁶ ジッドは厳格な清教徒であった母親の下、幼少の頃から自分に対して清教徒的な厳しい克己主義を課していた。しかし青年期にこのような厳しさに疑問を抱いたジッドは、カトリックにその解消を期待し、旧教の教理を読み始める。ところが、結局「教義」からは自分の信仰における疑問は解消されないと悟り、以後は聖書にのみ忠実であろうとした。(André Gide, *Si le grain ne meurt*, in *Souvenirs et voyages*, *op. cit.*, p. 221 参照。)
- ³⁷ *Ibid.*, pp. 262-269.
- ³⁸ André Gide, *Journal II 1926-1950*, *op. cit.*, p. 421.
- ³⁹ André Gide, *Littérature engagée*, *op. cit.*, p.73.
- ⁴⁰ Oscar Wilde, *The Soul of Man under Socialism*, *op. cit.*, p. 240.
- ⁴¹ *Ibid.*, pp. 240-241.
- ⁴² *Ibid.*, p. 243.
- ⁴³ *Id.*
- ⁴⁴ André Gide, *Journal I 1887-1925*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, Paris, 1996, p. 260.
- ⁴⁵ André Gide, *Journal II 1926-1950*, *op. cit.*, p. 296.
- ⁴⁶ André Gide, « Défense de la culture », *op. cit.*, p. 95.
- ⁴⁷ André Gide, *Retour de l'U.R.S.S.*, *op. cit.*, p. 787.
- ⁴⁸ André Gide, « Défense de la culture », *op. cit.*, p. 86.
- ⁴⁹ André Gide, *Littérature engagée*, *op. cit.*, p.55.
- ⁵⁰ *Ibid.*, p.54
- ⁵¹ *Ibid.*, p.55.
- ⁵² *Ibid.*, p. 58.
- ⁵³ André Gide, *Retour de l'U.R.S.S.*, *op. cit.*, p. 784.
- ⁵⁴ *Id.*
- ⁵⁵ André Gide, « Défense de la culture », *op. cit.*, p. 94.
- ⁵⁶ André Gide, *Retour de l'U.R.S.S.*, *op. cit.*, p. 779.
- ⁵⁷ *Ibid.*, p. 789.
- ⁵⁸ André Gide, *Littérature engagée*, *op. cit.*, p. 50.
- ⁵⁹ *Ibid.*, p. 40.
- ⁶⁰ André Gide, « Défense de la culture », *op. cit.*, pp. 92-93.
- ⁶¹ André Gide, *Littérature engagée*, *op. cit.*, p. 57.
- ⁶² *Ibid.*, p. 58.
- ⁶³ *Ibid.*, p. 57.
- ⁶⁴ *Ibid.*, pp. 57-59.
- ⁶⁵ *Ibid.*, p. 59.
- ⁶⁶ André Gide, « Défense de la culture », *op. cit.*, p. 96.
- ⁶⁷ Jean-Pierre A. Bernard, *Le parti communiste français et la question littéraire, 1921-1939*, *op. cit.*, p. 154.

- ⁶⁸ André Gide, *Littérature engagée*, *op. cit.*, p. 64.
- ⁶⁹ Norbert Kohl, *Oscar Wilde : The Works of a Conformist Rebel*, Cambridge, Cambridge University Press, 1989, p. 134.
- ⁷⁰ Oscar Wilde, *The Soul of Man under Socialism*, *op. cit.*, p. 246.
- ⁷¹ *Ibid.*, p. 248.
- ⁷² *Ibid.*, p. 249.
- ⁷³ *Ibid.*, p.248.
- ⁷⁴ *Ibid.*, p. 251.
- ⁷⁵ *Ibid.*, p. 248.
- ⁷⁶ *Id.*
- ⁷⁷ *Id.*
- ⁷⁸ *Id.*
- ⁷⁹ *Ibid.*, pp. 250-252.
- ⁸⁰ *Id.*
- ⁸¹ *Ibid.*, p. 262.
- ⁸² *Id.*
- ⁸³ *Id.*
- ⁸⁴ *Id.*
- ⁸⁵ *Id.*
- ⁸⁶ *Ibid.*, p. 263.
- ⁸⁷ *Ibid.*, p. 247.
- ⁸⁸ *Ibid.*, p. 267.
- ⁸⁹ *Id.*
- ⁹⁰ *Ibid.*, p. 266.
- ⁹¹ Oscar Wilde, *Œuvres*, sous la direction de Jean Gattégno, Paris, Gallimard, 1996, pp. 1786-1790.
- ⁹² Jef Last, « D'Oscar Wilde aux *Nouvelles nourritures* », *op. cit.*, pp. 129-130.
- ⁹³ André Gide, *Journal II 1926-1950*, *op. cit.*, p. 32.
- ⁹⁴ André Gide, *Retour de l'U.R.S.S.*, *op. cit.*, p. 791.
- ⁹⁵ *Ibid.*, p. 783.
- ⁹⁶ *Ibid.*, p.790.
- ⁹⁷ André Gide, *Oscar Wilde*, Paris, Mercure de France, 1989, pp. 26-27.

L'étude comparative du communisme chez André Gide dans les années 1930 et *L'Âme de l'homme sous le socialisme* d'Oscar Wilde

Akie NISHIMURA

Si André Gide approuve le communisme et fonde de grands espoirs sur l'U.R.S.S. pendant les années 1930, c'est qu'il le considère comme « équitable » et qu'il espère que le monde pourra parvenir à « une plus haute culture ».

Pour Gide, la société « équitable » désigne non seulement celle où est disparue la différence de richesse existant dans la société capitaliste, mais aussi celle où est reconnue la valeur de chaque individu. Il nomme ce respect de l'individualité « l'individualisme », et assimile la société qui l'admet au monde évangélique.

Quant à « une plus haute culture », elle peut être apportée par la société permettant aux artistes de créer des œuvres selon leur propre individualité. Gide espère que, lorsque cette société se réalisera, elle sera remplie de joie, et de ce fait, la culture même deviendra joyeuse.

Dans cette idée du communisme chez Gide, nous pouvons trouver des points communs avec celle du socialisme d'Oscar Wilde présentée dans *L'Âme de l'homme sous le socialisme*. Wilde estime que le socialisme élimine la pauvreté qui corrompt la nature des hommes et aide au développement de la personnalité de chacun. Comme Gide, il donne au respect de chaque individualité le nom d'« individualisme », et le considère comme une attitude conforme au précepte de Jésus. D'après Wilde, étant donné que l'individualisme trouve son expression la plus riche dans l'art, chaque artiste doit maintenir l'individualisme en écartant tous les empêchements extérieurs. À travers le socialisme, Wilde attend que la société future soit débordante d'allégresse afin de résoudre le problème de la pauvreté et de nous permettre d'exprimer l'originalité de chacun.

Ainsi, malgré la différente appellation de leurs principes, la société idéale pour Gide et celle pour Wilde se ressemblent essentiellement, et leurs arguments pour la réforme sociale sont fondés sur leur esprit artistique. Il est donc bien possible que Gide ait été influencé par l'écrivain anglais.